

翻訳老乞大朴通事の右側音

中村雅之

1. 左側音と右側音

16世紀初に崔世珍の著した諺解本『老乞大』『朴通事』(いわゆる「翻訳老乞大朴通事」)には個々の漢字に対してハングルによる二種の音注が施されている。そのうち左側に記された音(=左側音)が「俗音」であり、右側の音(=右側音)が「正音」であると、「翻訳老乞大朴通事凡例」(『四声通解』所載)に明記されているが、その「俗音」「正音」とは何かということについては、未だ必ずしも明確でないようである。

左側音には伝統的な「濁音」と「入声」が形式上体系的に記されているが、それが現実の音を反映するものでない可能性の高いことについては本誌前号の拙稿に述べたとおりである。すなわち、左側音は15世紀半ばの北方音(おそらくは北京音)を表記したものと考えて大過ない。それを申叔舟『四声通考』の「俗音」を転載する形で崔世珍が収録したものである。それでは「右側音」はいかなる性格の音であるか。それについての卑見を以下に述べたい。

2. 旧入声韻の音形

左側音と右側音は、旧入声韻の音形を除けば、大きな違いはない。つまり、崔世珍の称する「俗音」と「正音」は専ら旧入声韻を意識してのものとして見てよい。さらに厳密に言えば、旧入声韻の中でも中古音で[-k]韻尾を有していた韻の音形が問題になるのであって、もと[-p] [-t]であったものは俗音も正音もほとんど変わらない。(左側音に濁声母と入声韻尾が形式的に記されている点は今は問わない。前稿参照)

問題となる音形の具体例をいくつか見てみると、次のようである。(声点は省略)

	「学」	「角」	「北」	「黒」	「色」	「白」
<左側音>	hhiav [hiau]	giav [kiau]	byi' [pəi]	hyi' [həi]	syi' [ʃəi]	bbyi' [pəi]
<右側音>	hio	gio	be	he	se	be

一見して、左側音が現代北京語の白話音に、右側音が文語音に似ていることがわかる。換言すれば、北京語の白話音と文語音のルーツがここに見出されるということになる。左側音は元代のパスパ文字資料の音形と基本的に同じであるから、要するに伝統的な北京音と考えて差し支えない。そこで問題となるのは右側音ということになる。

3. 南京官話音の流入

結論から言えば、翻訳老・朴の右側音は、南京官話の影響を受けた北京の役人の発音であると私は考える。明初、南京に都が置かれた数十年間に南京音に基づく漢語が役人たちの間で共通語として位置づけられ、「官話」と称されるようになった。北京遷都の際、南京の役人も多く北京に入ったであろう。それから100年ほど経過した崔世珍の頃には、北京の役人の発音にも、上述の旧入声韻において南京音の影響を受けた音形が取り入れられていて、崔世珍はそれを右側音として記録したものと推測する。

したがって、崔世珍の言う「正音」とは南京官話の影響を受けた北京の役人の発音ということになる。当時の北京では、民衆と一部の役人は旧来の北京語を話し、役人の多くは北京語を基礎としつつも南京官話の影響を部分的に受けた言葉を話しており、崔世珍は後者を「正音」と認めたということであろう。

右側音が南京音の影響を受けていることは、上述の旧入声韻の音形を現代南京音（あるいは明清の宣教師資料）と比較してみれば、ほぼ明らかである。（下表において、現代南京音は『南京方言詞典』、19c.南京官話は Edkins のいわゆる『官話文法(1857)』による）

	「学」	「角」	「北」	「黒」	「色」	「白」
<右側音>	hio	gio	be	he	se	be
<現代南京音>	ɕioʔ	tɕioʔ	pəʔ	xəʔ	səʔ	pəʔ
<19c.南京官話>	hioh	kioh	peh	heh	shèh	peh

Edkins の表記で「-h」は声門閉鎖を意味する。右側音の表記には韻尾は記されないが、そこに声門閉鎖があったかどうかは、議論の分かれるところであろう。最も単純に考えた場合、旧入声韻の音節には二種類の声点（高調と上昇調）が付されていることから、南京音におけるような短い音節ではなかったと見なすことができる。少なくとも声門閉鎖を想定する場合には、よほど明確な論拠が必要となる。

15 世紀の初めに南京から北京に移った役人は、南京音で話したはずであるから、当然声門閉鎖を伴った短い入声を持っていた。一方、当時の北京人はおそらく現在の北京語同様の声調体系を持ち、入声はなかった。しかし、南京官話を話す多くの役人に影響されて、最も音形に違いのある [-k] 由来の旧入声韻において南京音が流入した結果、右側音のような音形を獲得することになったと思われる。したがって、崔世珍の頃には、北京の役人たちは旧入声韻を南京官話風の音形で発音することを、（実際にどの程度可能であったかは別にして）目指したのであろうし、たとえ声門閉鎖は伴っていなくても、気分的に短く発音しているつもりであったかも知れない。崔世珍の耳には、しかし、旧入声韻は十分に短くは聞こえず、ある音節は高調、ある音節は上昇調として、二種の声調に分けられた。その分岐の条件がおおむね母音の開きにあるらしいことは、遠藤光暁（1984）に詳しい。

4. 正音と俗音

翻訳老乞大朴通事における「俗音」は、周知のとおり申叔舟『四声通考』の「俗音」を転載したものであるが、「正音」と「俗音」の概念は、崔世珍と申叔舟では自ずから違いがあった。

『四声通考』は現存しないが、そのもとになった『洪武正韻訳訓』によって見れば、各字に付された「正音」は、理論的な産物であり、「俗音」が当時の北方の実際の音である。

「正音」が現実の音でないことは、声母に濁音を含み、韻尾に [-p] [-t] [-k] の三種を設けていることから容易に想像される。当時の南方にそのような体系がなかったとは断言できないが、北京と南京以外のいずれかの方言を「正音」として採用することが 15 世紀半ばにおいてあり得たとは思われない。『洪武正韻訳訓』の標音は、大雑把に言えば、北京音の音形に、中古音的な濁音声母と三種の入声韻尾を付け足したもので、全く理論的に作り出した「正音」ある。

一方、頻繁に見られる「俗音」の注記は、15 世紀半ば当時の実際の北京音を記したものと考えられる。ただし、前稿において論じたように、そこでも濁音声母は相変わらず形式上残っており、旧入声字にも形式上の韻尾として「ʼ」と「v」が用いられているが、それらの表記から実際の音声を取り出すことは容易である。つまり、申叔舟にとっては「正音」は本来あるべき理想の体系であり、「俗音」は現実の音声ということになる。

伊藤英人（2005）は 15 世紀半ばにおける陀羅尼のハングル注音を論じているが、そこに興味深い事実が指摘されている。『積譜詳節』（1447）の陀羅尼の注音は、当時まだ発行されていなかった『洪武正韻訳訓』の「正音」とほぼ同じもので、少し後の『月印積譜』（1459）の陀羅尼の注音には『洪武正韻訳訓』の「俗音」が採用されているという。伊藤氏はその理由を不明としているが、上述の状況に照らせば、解釈は容易である。すなわち、約 10 年を要したという『洪武正韻訳訓』の編纂の過程で、理論的な「正音」というものを作り上げ、『積譜詳節』（1447）にはその「正音」が採用されたのであるが、陀羅尼の性格上、音声化することが肝要なのであり、理論的な「正音」はその用に堪えなかった。そのため『月印積譜』（1459）では実際の音声を反映した「俗音」を採用したのであろう。

崔世珍にとっての「正音」「俗音」とは何かとえば、おそらく 16 世紀初の北京の役人の発音が「正音」であり、それと異なる発音が「俗音」ということであろう。あるいは逆に、『四声通考』の「俗音」とは異なる役人の発音を「正音」と見なしたと言う方が正確かも知れない。申叔舟が漢語を習った漢人たちは元代以来の純粋な北方語を話していたが、崔世珍が接した漢語は南京風の発音の影響を受けていた。そのために、両者共に北京人の発音を記しているのだが、一部分異なっているのである。北京音に対する南京音の影響はごく一部分であったため、全体としては右側音と左側音はよく似ている。右側音の中に南京風でない音（左側音と同じ音）が現れるのも、そのような事情によると考えられる。（たとえば「得 dyi' /dyi」「賊 jji' /jyi」など）

最後にこれまで述べたところを簡単な図にまとめておく。

	15 世紀半ば				16 世紀初			
北京音	学hiau	北pəi	黒həi	百pəi	学hiau	北pəi	黒həi	百pəi <俗音>
南京音	学hioʔ	北pəʔ	黒həʔ	百pəʔ	学hio	北pə	黒hə	百pə <正音>

↗

<参考文献>

伊藤英人（2005）「關於十五世紀朝鮮對‘正音’的認識」『韓国的中国語言学資料研究』（ソウル、学古房）

遠藤光暁（1984）「《翻譯老乞大・朴通事》里的漢語声調」『語言学論叢』13

中村雅之（2006）「翻譯老乞大朴通事の左側音の入声表記について」『KOTONOHA』41